

[インドネシア]

緑の森を取り戻そう！

森林資源の減少が深刻なインドネシア。
日本の協力で開発された育苗技術が、
現地の人々の手で普及され始めている。

Close Up!

ジャイカの
あしあと



「**や**」
つとこまで成長したな。
ビニールハウスいっぱい

に広がる緑に包まれ、元気に芽を出す苗木を丁寧に観察するのは、インドネシア林業省研究開発庁（FORDA）の研究員と、株式会社小松製作所の林業専門家、坂井睦哉さんだ。坂井さんは1991年から、FORDAとともに、東南アジア熱帯林を象徴する樹種のフタバガキ科の挿し木^{さしき}生産技術開発の研究を続けてきた。6年かけてようやく、挿し穂^{さしほ}1が育つための最も適した状態を作り出す、コマツ FORDA 細霧冷却システム（KOFFCOシステム）²を構築し、世界で初めてフタバガキ科挿し木苗の大量生産を実現させた。

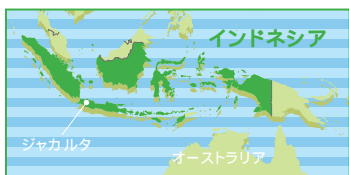
世界の熱帯林の約10%を占めるインドネシアでは70年代以降、大規模な商業伐採などで森林破壊が進み、その影響は森に生きる動物や地域住民の生活にまで及んでいる。そこで、林業省は荒廃した森を再生させるべく、フタバガキ科樹木などの植林に取り組んでいるが、その苗木を安定的に育てるための技術が不十分だった。

「挿し穂をつまく育てるには、光

湿度、温度、挿し床といった育成環境をいかに最適に調整するかが「カギ」と坂井さん。KOFFCOシステムは、湿度と温度の絶妙なバランスを保つことで育成環境を整え、しかも資金のからない手法として、インドネシア国内の林業関係者が関心を寄せている。

JICAもこの技術に注目し、2004年から今年2月まで、技術協力プロジェクト「郷土樹種造林技術普及計画」を実施。FORDAの地方支所4カ所を拠点に研修を行い、20以上の民間企業や研究機関などに技術を伝えた。そして今、彼ら自身がその技術を各地域の環境に合わせて改良し、森を守るための第一歩を踏み出した。

JICA専門家として研修の講師を務め、地方への普及活動も行った坂井さんは「インドネシアの熱帯林再生のために、この技術が現地の人々の手で広められ、定着して欲しい」と期待している。



1 挿し木のために切り取った茎や葉のこと。挿し穂は成長して挿し木苗になる。

2 葉の温度や温室内の気温、湿度、照度などのバランスが悪いと発根しにくいので、細かい霧を吹きかけて葉の温度を下げる冷却装置と、湿度の低下を防ぐ育苗ボックス、照度を調節する遮光ネット、ココナツ殻を活用した培土を組み合わせたもの。